官能記

芹原すなお

角川書店

官能記

原すなお

川書店

官能記

平成8年3月25日初版発行

著　者――芦原すなお

発行者――角川歴彦

発行所――株式会社角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3

〒102　振替　00130-9-195208

電話／営業部03-3238-8521

編集部03-3238-8451

印刷所――図書印刷株式会社

製本所――株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛に
お送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

© Sunao ASHIHARA 1996

Printed in Japan

ISBN4-04-872949-7 C0093

¥1650

目
次

まえがき　七
第一章　姉妹の園　一〇
第二章　匁児叔父さん　三八
第三章　捨てられっ子　六〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第四章　浪花天使　一〇五
第五章　ゼ　ゼ　一四七
第六章　銀幕縦横　一九九
第七章　禍福半世紀　二三七

装丁／平野甲賀

官能記

まえがき

五歳の女の子が五十歳くらいの男の人に手を引かれて、山道を歩いていました。

すでに紅葉の季節は終っていました。山の雑木はほとんど葉を落としていて、茶色に変わったかさかさの葉が細い山道を覆っています。もちろん針葉樹は落葉しませんが、その針のような葉の一本一本が深く濃い緑色に変わってしまったように見えます。あるいは冬を迎えるにあたって、針葉樹たちもその覚悟をしていたのかもしれません。

朝早く起きて長いこと汽車に乗ってはるばるここまでやってきたのですから、女の子はずいぶんとくたびれていましたが、見慣れない景色なので、愛くるしい目を大きく見開いて飽きることなくあたりを見回しているのでした。

男の人は腰に吊るした手拭いをとって、ときどき首筋を拭います。そして手拭いを腰のベルトに戻す前に、女の子の顔も軽くふいてくれました。女の子は汗をかいてはいなかったのですが、別にいやがりもせずにふかれるままにしていました。けっしてきれいな手拭いではなかったけれど、顔を優しくふかれると何とはなしにほっとしたような心地がしました。

黒縁の丸い眼鏡をかけた男の人は、丸刈りの頭に小さすぎる兵隊さんの帽子を被り、少

し黄色がかった草色の上下を着て、そのズボンにはくすんだ黄土色のゲートルを巻いていました。その恰好を見たとき、女の子はお侍さんの袴のようだとふと思ったものでした。

一方、女の子はかなりくたびれた紺絣の着物に、同じ生地で作ったモンペをはいていました。そして、臙脂のコールテンの足袋に、歯がすっかりちびた黒い鼻緒の下駄をはき、肩から斜めにズック地の鞄をかけています。この中にお弁当の蒸した薩摩芋が二本入っていたのですが、それはもう食べたからありません。だから、鞄は軽いものです。そして歩くたびにその荒い生地がモンペにすれて、すっ、すっ、と音がします。

もう日がだいぶ傾きました。よく晴れた日だったのですが、次第に雲が出てきて、二人が峠までたどり着いたときには、空は厚い雲にすっかり覆われていました。

そして、峠を下ってしばらくいったところで突然視界が開けました。眼下には、稲を刈り取ったあとの田んぼの黒い土が見渡す限り広がっています。その向こうに見える群青色の帯は海なんだと、男の人が教えてくれました。

そのとき、空からひらひらと桜の花びらのように雪が降ってきました。雪はどんどん勢いを強めて、もう十間先も見えなくなりました。気温が急激に下がったようです。

世界中が白と灰色になりました。そのとき女の子の心の中に、その年齢にはいささか似つかわしくない、ある「思い」が地下水のように静かに湧きだしてきたのです。

この子の密やかな思いは言葉としてではなく、むしろ、色や音の認識に似て、ほんとうに「思い」そのものとして胸に湧きだしてきたのでしたが、あえてそれを言葉にするなら、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

次のように言うのがもっとも近いかもしれません。

わたしはこの世界に何の借りもない。

これは一九五〇年――つまり昭和二十五年の、十一月のこと。女の子は男の人に連れられて遠い親戚の家にいくところでした。そして、その女の子がわたしなのです。

第一章　姉妹の園

1

親をなくしたわたしが引き取られていったのは、北陸の小さな町でした。

この町の主な産業は漁業と農業で、かつては絹の織物のための生糸の生産もそこそこあったそうですが、わたしがいったころにはすっかりすたれていて、小高い山の麓のところどころに桑の木の畑が残っていましたが、手入れは全然されてなかったようです。蚕もいないのだから手入れをする必要はありませんからね。

そんなだから、中にはずいぶんと立派な木に生長したのが何本かありましたが、わたしがよく遊びにいったお寺の境内に、それは見事な桑の木がありました。

高さは五、六メートルほどもあったでしょうか。これが夏には葉を青々と繁らせて、暗紅色のおいしい実をいっぱいつけました。どういうわけかわたしはこの木が大好きで、何かというとここにきて根元に腰を下ろし、幹にもたれてぼんやりと物思いにふけったものでした。相手は植物でも、わたしにとっては肉親の代わりのような存在だったのです。

そうそう、わたしがこの町にやってきたいきさつを少し話しておかねばなりません。

わたしが生まれたのは一九四五年の三月三日――ということは、わたしは雛祭りの日に生まれたということになるわけですが――生まれた家は埼玉県にありました。父は退役した元陸軍中将で、白い髭を生やした怖い顔の人という記憶がかすかにあるような気もいたしますが、これは後にさまざまな話から合成したものに違いありません。

母親はいませんでした。その代わりにずいぶんと歳の離れた姉がいたそうです。その姉はわたしが満一歳の誕生日を迎えてまもなく、家出したと聞きました。

その後、半年ほどして父が脳溢血でなくなりました。わたしは物心がつく前に、ひとりぼっちでこの世界に放り出されたわけです。

わたしの面倒をみてくれていた婆やが、とてもいい匂いのする部屋の中でわたしを抱きしめて、「ああ、お嬢様はひとりぼっちになってしまいました。おかわいそうに」と言ったのをかすかに覚えています。わたしはそのころ一歳半ですから、ずいぶんと早い記憶です。これまた後に頭の中で作り上げた贋の記憶かもしれないのですが、あのときの部屋のにおいが鼻の奥に今もありありと残っているので、これはほんとの記憶かもしれない、とも思えます。おそらく、あれは父の葬式の日のことだったのではないでしょうか。というのも、あのいいにおいは紛れもなく上等なお線香のにおいだったからで、あとから作られた記憶なら、そんなものがいつまでも印象的に残っているはずはないでしょう。

まあ、それはどちらでもかまいません。とにかくわたしはひとりぼっちになって、古い

小学校の教室を改造した、粗末な施設に引き取られました。そこでは、戦災で身寄りのなくなった子どもたちが暮らしていました。

ところで、ここまで父と書いてきましたが、お察しの通り、あれは父ではありませんでした。実は、あれは祖父で、姉がわたしの母だったのです。祖母はもう亡くなっておりました。

つまり、母は未婚のまま、わたしを生みました。世間体を考えて、祖父はわたしを自分の子どもとして籍に入れ、母は姉ということにしました。当時、祖母は亡くなっていたのだから、ずいぶんと無茶な話ですけど、世間ではままあることだし、あの土地の人たちは（少なくとも表向きは）そういうことで納得することにしたようです。祖父の人徳のお陰だったのでしょうか。

そして、母はわたしを捨てて駆け落ちしたわけです。ずいぶんと奔放な女ですが、そこらあたりをわたしは母から受け継いだのかもしれません。

もっとも、こういうことはみなずっと後になって知ったことです。

それから、三年ほどその「施設」（「孤児達の家」という、実に率直な名前がついていました）で暮らしたのち、わたしは遠縁の家に引き取られることになりました。祖母の里の本家筋にあたる海産物問屋です。そのときの主人――つまり、わたしの養父ということになるわけですが――が、母の何にあたるのか、いまだによく知らないのですけれども、多分、「又々」従兄くらいになるのではないでしょうか。

くわしい話はどうもよくわからないのですが、なんでも祖父の古い屋敷と土地を処分したお金で借金を清算し、施設にもそれまでの費用を収め、残ったお金を養父が管理して養育費に当てる、という取決めのもとに、わたしを引き取ることを承知したもののようです。その借金がいったい幾らくらいあったのか、そして残った額はどれほどだったのか、わたしはいまだに知りませんが、女の子一人を養うには十分な額だったのではないかと思います。

とにかくそういう取決めがなされ、わたしは役場のおじさんに連れられて北陸の町にきたわけです。そのときのことで記憶に残っていることは「まえがき」に書きました。

ときに、記憶といえば自分でも不思議に思うのですが、わたしはあのときの汽車旅行のことはわりとよく覚えているのに、それよりも前のことはほとんど何一つとして――祖父の葬式の日に婆やがわたしを抱きしめて「おかわいそうに」と言ったということ以外は――覚えていないのです。施設での生活は、あるいは思い出したくないようなものだったのかもしれません。まあ、それなら、いまさら思い出すこともないのでしょう。

とにかく、そのようにして新しい生活が始まりました。

そうそう、まだわたしは名乗っておりませんでした。もちろんわたしにも名前はあります。それをここで書いてもいいのですが、実を言うとちょっとためらいを覚えます。わたしの名前だけではありません。これから登場する人たちの中には、あるいは迷惑したり不快に思ったりする人もいるかもしれないので、――わたしの知ったことではないのですけ

ど――いらぬ軋轢を避ける意味で、わたしはすべて仮名を使うことにいたします。仮名を使っても読む人が読めばわかるんでしょうが、それはもう仕方がありません。

さて、その仮名というのも、なかなかむずかしいものです。まだ他人の場合はいい。適当につければ、最初は妙な感じがしても、そのうちに慣れてどうも思わなくなります。ですが、自分の場合だといつまでたっても違和感が消えません。ある名前を思いついても、必ずそういう名前を持った知人がいます。その名前を使うと必ずその人の顔が浮かぶ。どうも具合が悪い。

そこでわたしは思い切って、今わたしの膝の上で気持ちよさそうに眠っている猫の名前を借りることにしました。ですから、わたしは、「みーこ」です。

このことについては、本家のみーこは別になんとも思っていないようだし、そもそも、みーこなる名前をつけたのはわたしなんですけど、まあお詫びと謝礼の意味で、この本を書き上げるまで、みーこにアメリカ製の「キャッツ・デライトのプラチナ缶」というのを毎晩御馳走することに決めました。これは普通の三倍くらいする高級猫缶なのです（猫缶はへんですね）。それで堪忍してね、みーこ。性のいいみーこは「にゃー」と鳴いて快く承知してくれました。

さて、いよいよ、人間みーこの物語です。

わたしを引き取ってくれたのは、「松富海産」の主、松富統太郎という人です。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com